

2020年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	就学児の「読み」困難におけるスクリーニングシステムの構築 —就学児への「読み」スクリーニング検査作成における基礎的研究—
キーワード	①就学児、②読み、③スクリーニング検査

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏名	ミヤモト ナオミ 宮本 直美	所属等	大阪千代田短期大学 幼児教育科 准教授
プロフィール	大阪教育大学院教育学研究科修士課程（実践学校教育専攻）を修了。大阪市及び大阪府の公立学校教員として通常の学級の担任、通級指導教室の担当者、就学支援相談員等として勤務。学校心理士資格を取得し、特別支援コーディネーターとして教育的なニーズのある児童への支援及び、保護者への教育相談を行った。小学校1年生の通常の学級において、読み書きの苦手な子どもや読み書きの習得に時間がかかる子どもに対して、休み時間や隙間時間を利用した読み書き支援を行った。読み書きに困難をかかえる子どもに対する ICT 機器を活用した読み書き支援の実践研究にも取り組んだ。2018年より現職。現在は研究協力園の教員と連携し、就学児の「読み」に関する研究を推進している。		

1. 研究の概要

本研究では、幼稚園等における年長児の「読み」に関する実態について、「読み」に関する行動観察とひらがなの「読み」の習得度及び「読み」に関する認知能力から明らかにすることを目的とした。年長児に対して、「読み」に関する行動観察とひらがなの「読み」の習得度及び「読み」に関する認知能力の調査を行った。「読み」に関する年長児の行動観察は担任教員に依頼した。ひらがなの「読み」の習得度及び「読み」に関する認知能力の調査は筆者が行った。文字に関心がある年長児の多くは、ひらがな清濁音 71 文字中 60 字以上読めたが、特殊音節の読みは清濁音の読み比べて習得字数の差が大きかった。ひらがな清濁音 71 文字と特殊音節に関する「読み」の認知能力としては、自動化と音韻意識が考えられ、特に自動化は特殊音節の読み清濁音よりも強く関係していると考えられる。

2. 研究の動機、目的

(1) 研究の動機

筆者はこれまで、小学校で読み書きに困難のある児童に対して、通常の学級の担任や通級指導教室担当教員として、一人一人の教育的ニーズに応じた個別の支援について研究を進めてきた。一般的に読み書きに困難があると思われる児童については、担任教員と授業の様子等から困難の状態について確認し、テストや検査などから、客観的に児童の実態を把握して校内委員会にはかり支援にあたる。この一連の流れにはある程度時間がかかり、個別の支援開始は早く2学期以降になることが多い。しかし、この時期は漢字学習が主で、ひらがな読み困難のある児童への支援は後手となった。保護者と教育相談を行った際、対象の児童は幼児期から自分の名前を読まなかったり、絵本に見向きもしなかったりしたなどの、「読む」ことや「文字」に興味なかった等のエピソードを聞くことが多かった。

太田・宇野・猪俣 (2018) は、幼稚園年長児のひらがな清濁音 71 文字における平均読字数は 64.9 文字であり、ほぼ全てのひらがなを読むことができる状態で入学していると報告してい

る。このことから、ひらがなの読みに困難を示すであろうと予測される年長児を早期に発見することは可能であると考えられる。川崎（2017）は「読み」の発達の初期より「読み」に困難な症状を示す子どもほど重症であり、先延ばしにすることなく早期の介入が必須であると述べている。発見が遅れるほど、学習上の遅れは深刻になることから、「読み」に困難のある子どもを早期発見することは必須であり、客観的な検査等から一人一人の教育的ニーズに応じた支援を行うことが必要である。「読み」は学習の習得に直結することから、教育委員会と連携して「読み」のスクリーニングシステムを構築することが重要と考える。しかし、幼児の「読み」に対する現場で簡易に使用できる幼児用のスクリーニング検査は現在作成されておらず、その開発が急がれる。

（2）本研究の目的

本研究は、年長児の「読み」について、教育現場で使用できる簡易なスクリーニング検査を作成するための基礎的研究と位置付ける。本研究では、幼稚園等における年長児の「読み」に関する実態について、「読み」に関する年長児の行動観察とひらがな「読み」の習得度及び「読み」に関する認知能力から明らかにすることを目的とする。

3. 研究の結果

（1）研究の経過

年長児に対して、「読み」に関する行動観察とひらがな「読み」の習得度及び「読み」に関する認知能力の調査を行った。「読み」に関する年長児の行動観察は担任教員に依頼した。ひらがな「読み」の習得度及び「読み」に関する認知能力の調査は筆者が行った。

対象幼児 近畿地方の人口約 10 万人都市にある幼稚園型認定こども園 A に在籍する、保護者の同意を得ることができた年長児 34 名である。

調査課題 調査課題は 4 つを設定した。ひらがな清濁音 71 文字と特殊音節の習得度課題として、国立国語研究所が読み書き水準調査で使用した、「読み」についてのテスト課題を用いた。自動化課題は、STRAW-R（改訂版標準読み書きスクリーニング検査-正確性と流暢性の評-）から RAN 課題を用いた。音韻意識課題は、モーラの認識課題と音韻操作課題を独自に作成した。視覚認知課題はフロスティグ課題を参考にして独自に作成した。

手続き 検査実施期間は 2021 年 3 月に 5 日間実施した。検査の場所は A 園の使用されていない保育室であった。検査時間は午前中の自由保育時間 9 時～12 時であった。文字の習得度課題、自動化課題、音韻意識課題、視覚認知課題はそれぞれ別の日に実施した。文字の習得度課題と自動化課題は個別で、音韻意識課題と視覚認知課題は、基本的には 2～3 人のグループで実施した。

分析方法 文字の習得度課題では、文字カードを読むことができた場合に、一字につき 1 点を与えた。ひらがな清濁音 71 文字は合計 71 点満点、特殊音節は合計 12 点満点であった。自動化課題は、STRAW-R（改訂版標準読み書きスクリーニング検査-正確性と流暢性の評-）の検査手順に従い、RAN 課題 3 題を実施し、読み始めから読み終わりまでの時間を計測して平均を求めた。音韻意識課題は、モーラの認識課題、音韻操作課題の正答に 1 点を与え合計 6 点満点であった。視覚認知課題は合計 9 点満点であった。

倫理的配慮 研究対象施設長、年長児の各学級担任に研究内容と目的、プライバシーの保護について書面と口頭にて説明し、検査の承諾を得た。その後、保護者説明会を行い、説明書と承諾書を配布した。保護者が承諾書に署名することで同意を得たとした。年長児本人には、検査当日に検査の目的と内容を説明し、口頭での承諾と承諾書に署名することで同意を確認した。保護者の同意を得た年長児で、本人からも同意を得た年長児を対象者とした。

（2）結果

教員による年長児の行動観察 担任教員からは対象の年長児の「読み」に関する行動として、床に髪の毛が「し」の形のように落ちているのを見て『し』だよ』と言うなど、形からひらがなを連想する姿や、「かば」の反対は「バカ」になることに気がついて喜んでいたり、音韻を操作する様子が報告された（表 1）。対象年長児は全員、文字に関心を示していると担任教員は評価した。

「読み」の習得度及び「読み」に関する認知能力の調査 文字の読字数と各課題の得点の平

均と標準偏差を表2に示す。ひらがな清濁音 71 文字のうち 60 字以上習得している年長児は 99.1%であり、特殊音節課題を半分以上習得している年長児は 73.5%であった。

ひらがな文字の習得度と各課題に関連があるかについて検討するため、相関係数を算出した。ひらがな清濁音 71 文字と読みに関する認知能力との関連について検討するため、清濁音 71 文字の読字数と各課題の得点について、外れ値が含まれるため Spearman の順位相関係数を算出した (表3)。

表1 教員による年長児の行動観察

分類	内容
文字の形状	髪の毛の形状から「し」の文字を連想 画用紙の切り抜きから「の」の文字を連想 名札を見せ合い同じ形の文字を見つける
文字・音韻の操作	「かば」の反対は「バカ」 「さいふ」から「ふ」をとると「サイ」 「あ」から始まる物探し (図1)
コミュニケーション	手紙のやり取り



図1 「あ」から始まるもの探し

ひらがな清濁音 71 文字の読字数と自動化課題の間には、有意な負の相関がみられた ($r=-0.498, p<.05$)。相関の強さは中程度であった。ひらがな清濁音 71 文字の読字数と音韻意識課題の間には、有意な正の相関がみられた ($r=0.368, p<.05$)。相関の強さは弱かった。自動化課題と音韻意識課題の間には、有意な負の相関がみられた ($r=-0.579, p<.05$)。相関の強さは中程度であった。ひらがな清濁音 71 文字の読字数と視覚認知課題、自動化課題と音韻意識課題、及び音韻意識課題と視覚認知課題には相関はなかった。

表2 各課題の平均得点と標準偏差と中央値

	清濁音 (Max=71)	特殊音節 (Max=12)	自動化	音韻意識 (Max=6)	視覚認知 (Max=9)
平均得点	65.1	7.8	22.0	4.1	7.7
標準偏差	±13.9	±4.0	±5.0	±1.1	±1.6
中央値	69	9	20.7	4	8

※Maxは課題の満点を表す

表3 清濁音71文字と各課題の順位相関係数

課題	1	2	3	4
1. 71文字の読字数	—			
2. 自動化課題	-.498*	—		
3. 音韻意識課題	.368*	-.579*	—	
4. 視覚認知課題	.201	-.086	.298	—

* ($p<.05$)

特殊音節と読みに関する認知能力との関連について検討するため、特殊音節の読字数と各課題の得点について、外れ値が含まれるため Spearman の順位相関係数を算出した (表4)。特殊音節の読字数と自動化課題の間には、有意な負の相関がみられた ($r=-0.639, p<.05$)。相関の強さは中程度であった。特殊音節の読字数と音韻意識課題の間には、有意な正の相関がみられた ($r=0.423, p<.05$)。相関の強さは中程度であった。自動化課題と音韻意識課題の間には、有意な負の相関がみられた ($r=-0.579, p<.05$)。相関の強さは中程度であった。特殊音節の読字数と視覚認知課題、自動化課題と音韻意識課題、及び音韻意識課題と視覚認知課題には相関はなかった。

自動化と清濁音 71 文字、特殊音節の相関係数に中程度の負の相関があった。自動化と特殊

音節との相関の方が清濁音 71 文字の相関より高かった。音韻認識と清濁音、特殊音節の相関係数は中程度の負の相関があった。清濁音、特殊音節で相関の程度は等しかった。視覚認知と清濁音、特殊音節に相関はなかった。文字に関心がある年長児の多くは清音 41 字以上読めたが、特殊音節の読みは清音の読み比べて習得字数の差が大きかった。清濁音 71 文字と特殊音節に関連する読みの認知能力には、自動化と音韻意識が関連しており、特に自動化は特殊音節の読み清濁音よりも強く関係していると考えられる。

表4 特殊音節と各課題の順位相関係数

課題	1	2	3	4
1. 特殊音節の読字数	—			
2. 自動化課題	-.639*	—		
3. 音韻意識課題	.423*	-.579*	—	
4. 視覚認知課題	.260	-.086	.298	—

* ($p < .05$)

附記 調査にご協力いただいた年長児の皆様、幼稚園等の諸先生方に心からお礼申し上げます。

4. 研究者としてのこれからの展望

本研究から、年長児の約 99%は清濁音を 60 字以上読むことができ、特殊音節の読みは清濁音の読み比べて習得字数の差が大きいものの、約 73%の年長児は特殊音節課題の半数以上を読むことができることが確認できました。この事から、就学児に対して読みのスクリーニングを行うことは可能であると考えます。ひらがな清濁音 71 文字と特殊音節に関連する読みの認知能力には、自動化と音韻意識が関連していると考えられることから、スクリーニング検査には自動化課題と音韻認識課題が必須であると考えられます。本研究はひらがなの習得に対する研究であり、漢字の習得は対象としていません。日本語は仮名に加え形態的に複雑な漢字を使用する言語であることから、視覚性記憶、位置や傾きの認識の問題などが読み困難に関わる可能性が指摘されています(関口・吉田, 2012)。今後は補助検査として、視覚認知課題についても検討していきたいと考えています。

将来的には、市町村教育委員会等に対して、幼稚園等の就学前施設と小学校が連携した、読みのスクリーニングシステム構築の提案を行います。小学校入学後に読みの困難が予測される子どもたちに対して、一人ひとりの教育的ニーズに応じた支援が、就学児から小学校入学以降も引き続き行われることが一般的な社会を実現するための一役を担えればと考えています。

5. 社会(寄付者)に対するメッセージ

今回の学習指導要領の改定では、重要事項として初等中等教育の一貫した学びの充実が挙げられています。特に、学習が始まる小学校において、幼稚園等の就学前施設からの学びの連続性を大切に、学びの円滑な接続を図ることは重要です。小学校からの学びでは、文字を読んだり書いたりすることは学習における重要なスキルです。文字を読むことから文字学習が始まることを考えれば、読みに教育的なニーズのある子どもに対する早期からの支援は欠かせません。また、読みには様々な認知能力が関係していることから、個別に最適化された支援を行うためには、読みに関する認知能力の実態を正確に把握する必要があります。現在、就学児に対する読みのスクリーニング検査は作成されていないことから、その作成は急務であると考えております。

今回のご支援により、幼稚園等の就学前施設において、保育者の読みに関する年長児の行動観察の視点や年長児のひらがな読みに関する実態について把握することができ、スクリーニング検査作成の基礎的な調査を行うことができました。今後はさらに研究を進め、読みに困難が予測される就学児の早期発見と個別に最適化された支援につなぐスクリーニング検査の完成を目指していきたいと思っております。本研究の遂行にご支援を頂きました、日本私立学校振興・共済事業団とその関係者の皆様に深く感謝申し上げます。